

【 1 】

氏名	田 辺 保 た なべ たもつ
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 103 号
学位授与の日付	昭 和 51 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	パスカルの世界像

論文調査委員 (主査) 教授 本城 格 教授 辻村公一 教授 山田 晶

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はパスカルの諸作品、特に「パンセ」において、作者が独自の技巧を駆使した言語表現を通じて、いかなる二次の世界表象を築き上げたかの考察を目的とする。本論文の構成は序論と四章にわたる本論よりなる。著者はまず、序論において、「夢」に関する「パンセ」の諸断片の分析から説きおこし、「夢」と「現実」の相違、ヴィジョンの創造性、イマージュ形成作用としてのイマジナションに対する積極的評価に関して、歴史的に検討し、パスカルと現代詩人・思想家とを比較してパスカルの卓越した先駆者的洞察の深さを指摘する。ヴィジョンとは、ここでは、精神の目によって見られた、より高次の現実を意味するが、このように「見られた」世界の姿を精神が確かに保有する時、ヴィジョンは当然「世界像 vision du monde」となる。これが人間を真に生かす秩序となるためには、いかなる条件が必要であるか、世界像との連関においてイマジナションの働きが虚妄の対象に執着して放恣に流れるのを防ぐにはいかにすべきかを考察し、パスカルはこれらの事柄を十分理解してその思想の構築を進めていることを明らかにする。パスカルにあっては、描き出された多彩なイマージュの根底に熾烈な真理への愛があり、どこか疑いようのない基底に根ざしたヴィジョンの実際的体験が秘められており、その根底に立ってイマジナションを一つの方法として活用し、読者に訴えかけて行く「パンセ」独特の技巧が生み出されてきたと考える。

第一章「形成」においては、パスカルの思想が彼自身の具体的な人格形成過程と密接な関連を有することが論じられたあと、その生涯の主要な諸事件、諸関係（家族、友人など）が彼の内的意識の発展にどのような意味を持ったかが考察され、さらに彼の科学研究の方法の独自性、病気の体験が思想形成に与えた重大な影響、「最初の回心」の内容、社交生活の意味、「誠実の道」の理解、「決定的回心」とその記録である「メモリアル」の分析、晩年の安らかな信仰者としての態度など、独特の世界像の完成に至る諸契機が取り上げられ、それらの要因が一人の人間の実存に対して持つ働きかけが限定され、その置換不可能な意味づけの内実が説明される。

第二章「源泉」では、パスカルのイマージュの形成に当って特に読書の及ぼした影響が論じられる。(1)

聖書 (2)モンテーニュ (3)ジャンセニスト作家。聖書に関しては、パスカルは生涯を通じて聖書の世界と日常密接に接触していたこと、ヨハネ福音書との対比により「パンセ」の顕著な霊的性格などが指摘され、聖書の理解に向うパスカルの態度、その極めて主体的な在り方が明らかにされる。彼が聖書から教えられたものは、何よりも目に見えない秩序に裏づけられ、より深い次元との関わりにおいて見られた世界の姿であり、これが「パンセ」の究極的な世界像になる。モンテーニュに関しては、「スポンの弁護」の著書が人間の思い上りを打ちのめし、その悲惨さを豊富な引用例によって描いており、パスカルはその手法から多くを学び、種々具体例を借用しているが、パスカルはモンテーニュの見ようとしなかったこれら「諸結果の理由」を問わざるをえなかったところに彼の悲劇がある。最後に、ジャンセニスト諸作家が「最初の回心」以後パスカルの精神に与えた暗さ、ジャンセニウス、アルノー、とりわけ「キリスト教的・霊的書簡」によるサン・シランの大きな感化が取り上げられ、殊に「象徴」論に与えたサン・シランの影響が強調される。

第三章「背景」は三部に分かれ、第一節では科学史上の潮流、第二節では芸術思潮との関連において、第三節では宗教思想の面から論考が進められる。17世紀に科学史上いかなる変革が起ったか、パスカルはこの新しい宇宙観を受けとめていかなるヴィジョンとして表象したかが考察される。たとえば「無限」などの語もリベルタンを説得するため比喩として利用されているが、この「無限」が人間の率直な感情に「恐ろしい」ものとして受けとめられ、このイマージュが実は人間的自然の根本的頹落を宇宙大の規模で写し出したものと考えられる。

17世紀前半は、フランス文学史上バロック時代と称されているが、パスカルの作品がバロック的と評される時、それはいかなる意味においてであろうか。バロックの定義、パスカルの文体のバロック的特長、ジャンセニズムとバロックとの関連、パスカルの世界像とこの表現形態との本質的なつながりなどが、この未開拓の分野に一試論として提出されている。

サン・シラン、パスカルを通じて光と影の対比、影の部分の強い現われが認められるが、「闇と暗黒」を示す語を手懸りに「パンセ」の世界がいくつかの段階を追うて解明される。闇、暗さ、盲目の神学的意味が明らかにされ、微かに射しこむ光がこの世界に「希望」をつながしめることなどが時代史的社会的な展望を加えて論述される。なおこの項に関する参考論文として、論文抜刷3冊(「パスカルとサン・シラン」1, 2 および「暗さについて」)が添付され、サン・シランのパスカルに対する霊的影響が強調される。

第四章「パンセの世界」では、パスカル自身の分類によるラフュマ版「パンセ」の順序に従い、「パンセ」に組み上げられたパスカルの「生きられる」秩序の全体像が描かれると共に各断章相互の連関、原稿綴りの章を追うての微妙な展開が解明され、ラフュマ版によるパスカル思想の再記述の試み、その一つの解釈例が提示されている。なお、その発展として副論文2冊(「パンセ断章—66, 67の一解釈」)および「同断章77—79の一解釈」が添付されている。

「パンセ」の訴えの中心は「心において理解」することであり、この一挙に核心を貫こうとするパスカルの文章全体の目ざすある本質的な思考の方向が、ついに一キリスト教徒の護教の意図を超えて、人間すべてを「愛の」紐帯でつなぐ共同体のヴィジョンに達していることが最後に結論として示される。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、パスカルが「パンセ」において、独自の技巧による言語表現を通じて、いかなる世界像を築き上げたかの考察にある。著者は言う、「パンセ」の本質は単に「宗教的生が至上のあり方」であり、「他宗教に比してキリスト教教理の優秀性」を説く弁護の書にあるのではなく、この地上で種々の矛盾と弱さを有する人間が、「自己内部の深淵と暗さを見つめた上で、なおかつ、生きられる秩序としての世界を構想する」ことにあると。ある詩人にとって、夢が平俗な現実からの脱出口となり、この現実を超えた世界を見るヴィジョンとそれを織りなすイメージ形成の作用イマジナションが何よりも追及されるように、「生存の根底に開いた裂け目から生の本質的な不条理」を見たパスカルにあっては、精神の内部で必死の思いで構築されたヴィジョンこそ、人間の生きられる秩序であり、この世界像によって真実の生を生き始めるのである。新しい光の下に姿を見せ始めた世界像を他人にも伝えて同じ感動を与えたいとの願いが護教論を計画させるに至ったとも言えよう。したがって著者の関心は専らパスカルの内部における世界像の形成過程とそれを織りなすイメージの考察に向けられ、「パンセ」の論理的構造やそこに現われた人間の基本的構造の解明にあるのではない。われわれはまず、かかる面よりする「パンセ」へのアプローチに、著者の独創性を認めなければならない。

本論に入って、第一章「形成」において著者は、パスカルの生涯の主要な諸事件、諸関係（家族、友人）など、彼の内的意識の発展と独特の世界像の完成に至る諸契機を取り上げ、考察しているが、中でも「決定的回心」の記録「メモリアル」に関する記述には特に精彩があり、その精密な分析は、著者の多年の研鑽の成果と言えよう。またパスカルの友人関係、姉および妹との兄弟関係が彼の思想形成に果たした役割の考察も注目に価する。

第二章「源泉」では、パスカルのイメージ形成に当って特に読書（聖書、モンテーニュ、ジャンセニスト作家）のもたらした影響がきわめて的確に指摘されている。サン・シランの「キリスト教的・靈的書簡」による大きな影響は、この章ならびに次章第三節と副論文三冊にわたって、詳細に論じられ、この世の闇と盲目のイメージ、あるいは「象徴」論に与えた彼の影響が強調されている。殊に副論文2においては、姉に宛てたパスカルの書簡の詳細な分析によって、パスカルに対するサン・シランの種々の靈的影響が実証的に示されている。

第三章「背景」は科学、芸術、宗教の三節に分けられ、「パンセ」を生み出した背景について考察がなされている。殊に注目すべきは、科学者パスカルが「無限」、「賭」などの科学用語を当時のリベルタンを説得するため、有効な比喻として利用したのだという興味深い、独特な見解を提出していることである。

第四章「パンセの世界」では、著者はラフュマ版「パンセ」の順序に従い、いかなるイメージ化によって世界の諸様相が表象されているかを中心にして、「パンセ」に組み上げられたパスカルの世界像をあとづけている。近時、ラフュマ版によるパスカル思想の再記述が研究者の中心的課題となっている観があるが、著者がここに新しい角度からする一つの解釈例を呈示したものとと言える。

なお、著者は第三章第二節でパスカルとバロックとの関係という未開拓の分野を取り上げ、パスカルの文体のバロック的特性、ジャンセニズムとバロックとの関連、パスカルの世界像とこの表現形体との本質

的なつながりなどを論じている。なるほどパスカルの生きた時代はまさにバロックの時代であり、戦争、ペスト、飢饉という悲惨な状況であった。パスカルの暗さと悲惨のイメージもその時代に深く結びついているのであって、バロックをあくまで「パンセ」の時代背景としてとらえる限りにおいては、きわめて重要な、興味ある問題であると言えよう。しかし、パスカルの文体がバロック的特性を有しているとなると、著者が実例をあげて論証してはいるが、それだけでは説得力を欠くと言わなければならない。パスカルの文体は、内に渦巻く感動を秘めていようと、外面的には、「イエス・キリストは大切な事柄を実にあっさり語られる。」というパスカルの言葉通り、淡々とした明晰な語り口ではなかろうか。いま一つ指摘すべきことは、パスカルの世界像を扱った本論文の範囲外とは言え、「パンセ」に見られる独特の動的な論理構造を明らかにすることが望ましいが、この点は著者も十分自覚しており、より広い視野の下に計画されている「パンセの構造」の成果に期待したい。以上述べたように本論文は、なお望むべき点が見られるが、いくつかの独創的な面を有する高い水準の労作であり、この分野の研究に資するところ大であると考えられる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。